

## 触る守邦先生 福来たる♪

今でも、いつの間にか守邦先生モードになっている自分に気づくことがあります。

職場で書類に目を通していると、「この文の根拠は？」などと不明瞭な点について質問をしてみます。職場以外でも、趣味に興じている時、好きな俳優について話している時、無意識に予測・検証・結論、といった手順をとって物事を突き詰めている自分がいるのです。いつから私はこのような人間になったのか、振り返ってみると（勿論元々の性格もあると思うのですが）守邦先生の御指導の下で卒論に励んでいるうち、知らぬ間に養われていた、という結論に至りました。

今でこそ守邦先生ファンの私ですが、大学に入学したての時の印象はまさしく「触らぬ神に祟りなし」という心持

ちでした。

入学当初、ドキドキしながら書類を学科研究室に届けに行った時、守邦先生に遭遇したことがありました。「国文学概説」を受講していた私は、緊張しつつ先生に話しかけたものの、あの飄々とした江戸っ子風な物言いに恐怖心に近い感情を覚えました。以後、先生のことを「話しかけてはならぬ人」と心に決め、その日以来三年の演習を受講するまで、なるべく気付かれぬように学生生活を送りました（当時の私にはその物言いが、温かい、親しみのあるお人柄を表していると理解できてなかったのです）。

そんな私が、縁あって守邦先生ゼミでお世話になることになりました（本当に「縁」を感じるばかりです）。私は柳亭種彦を卒論のテーマに希望し、佐藤悟先生のゼミに入

小 口 友 加

ろうと心積もりしていました。しかし、佐藤先生が研修で一年間大学にいらっしやらないことになったため、守邦先生に指導を引き受けて頂くことになったのです。そんな訳で三年生の秋頃、運悪く（今となつては「運良く」ですが）、もう一つの近世文学ゼミである守邦先生ゼミへと、泣く泣く入ることになりました。三年生の演習の授業でも、なるべく先生の目につかぬよう過ごしました。先生が引率して下さるという江戸散策にも参加せず…（今思うと「なんと勿体無いことを！」と後悔するばかりです）。

四年生ともなると、そういうわけにもいかぬ状況に陥りました。私達の代のゼミ生は二十人位の大所帯でしたが、ゼミの授業で毎回全員が研究の途中経過を発表していました。先生は毎回毎回適切なアドバイスを全員に下さいました。卒論の指導をして頂くうちに、独特のお話し振りに、少しずつ慣れ、私の中の先生に対して身構えてしまっていた部分が、次第にほぐれていきました。打てども打てども響かず、飲込みの悪い私が、毎回訳の分からぬ発表をしているにも関わらず丁寧な御指導下さったこと、感謝するばかりです。フラフラしていた筋が、アドバイスを受けて作業を進めるにつれ、徐々に一つの方向に定まっていく感覚を得た時には、本当に充実感を覚えました。ご指導をして頂いて知らぬ事が出てくる度に先生のヒントを手掛かりに

調査に戻りました。問題が解決する度に、どんどん研究が楽しくなり、学びの楽しさを感じていきました。自分が感じた疑問に対して答えを予測し、その推論を検証していく楽しみは、「自分は意外に理系なのか？」と思う程心躍るものでした。

また大学での活動の他に、寛永寺における天海版一切経の調査に参加させて頂く機会も頂きました。ひたすら部首ごとに分けているうちに、判断のつかぬものがあると気になってしまい、パソコンや辞典で「そこまで調べなくて良い」と言われる程、調査にのめり込んでいきました。先生と楽しくお話をしながらの作業の日々は懐かしい思い出です。

決定的に守邦先生ファンと化したのは、先生のお誕生日の時です。ゼミ生みんなでプレゼントしたてぬぐいをたいそう喜び下さって、てぬぐいを頭に巻いて小躍りされたお姿を目にしたのです。とても衝撃的でした。この出来事によって、それまでは授業後の居酒屋での食事会に食べ物目的で参加していた私も、先生と御一緒にできる時間に惹かれ、積極的に先生を誘う人間となつてしまいました。

卒論研究や食事会、寛永寺の調査等で先生とたくさんお話させて頂いたことで、先生の短いお言葉の中につまった、たくさんの温かさややさしさに触れ、いつの間にか守邦先

生ファンの一人となつてゐる自分がいたのです。

「触らぬ神に祟りなし」だった私が今や、「触る守邦先生に福来たる！」。

声が掛からずとも守邦先生ゼミOG会の幹事をやりたがり、先生や現役生、先輩方に毎年お会いできる日を楽しみにしている自分がいます。ゼミ会でたくさんの方々とお知り合いになれたことも、とても大きな財産となつております。今でも時々、単位を落としてまた守邦先生ゼミにいる夢を見るほどのファンぶりです。

たとえば母校に再入学し、単位を落としても先生のゼミに入ることは出来なくなりますが、これからも守邦先生との接点をどうにかこうにか見つけていくつもりです。御健康に留意され、いつまでも私たちの良き福の神様でありつづけてください。

末筆ながら、筆下手の私が自分勝手に守邦先生像を書き綴らせて頂きましたこと、失礼なことが多々あるかと存じます。笑覧くださり、お許し頂ければ幸いです。

（こぐち ゆか・本学大学平成十一年度卒業）